

小学館アカデミー

Shogakukan Academy
Ginza Tokyo

絵画倶楽部

銀座校

三軒茶屋校

小学館アカデミー 絵画倶楽部 開校 20 周年特別企画

エッセイコンテスト

受賞作品集

～絵画と私～

2021年8月27日 受賞作品発表

銀座校・サロンコース月C④前半

【大 賞】有田 紀代子「絵画教室と私」

銀座校・毎週コース土B②

【審査員特別賞】矢崎 達人「最大のテーマ」

銀座校・隔週コース木C①後半

【優 秀 賞】鈴木 尚子「父と私と絵を描く会」

銀座校・毎週コース木A②

中村 達也「リズムのある絵を目指して」

三軒茶屋校・隔週コース火B①前半

三嶋 俊一「絵画と私」

- 2021 年 6 月 30 日までに応募いただいた全 74 作品のなかから、講師と事務局による慎重かつ厳正なる審査を 7 月に行い、各受賞作品を決定いたしました。
- 受賞者のお名前を掲載するにあたり、敬称は省略させていただきました。
- 受賞作品は、基本的には原文のまま掲載しておりますが、明らかな誤字脱字等があった場合は修正させていただいております。また、冊子の統一感をはかるため、字下げ（文頭の 1 マス空き）は統一させていただきました。
- 応募要項にも記載しておりますが、応募作品の著作権等一切の権利は主催者に帰属するものとし、作品の公表や要約等の翻案などはすべて主催者の判断で取り扱いさせていただきます。

ご応募いただいた皆様、本冊子をご一読いただいている皆様、誠にありがとうございます。
感謝とこれから……今後とも本アカデミーをよろしくお願い申し上げます。

大賞

絵画教室と私

有田 紀代子（銀座校・サロンコース月C④前半）

今から数十年前、私が料理教室の講師をしていた時、野菜や魚の絵、その切り方や展開図などを、紙に描き、白板に貼って生徒に、その絵を見ながら説明していました。

ある時、一人の生徒が「先生の『絵』が楽しみなんですよ」と

笑いながら言った言葉が私の胸を打ち、私が描いた絵でも楽しみに、見てくれる人が居るということを知り、とても嬉しかった。

「絵」が人の心を動かし、そして私と生徒との懸け橋になり、教室を盛り上げてくれる、そんな力が『絵』には、あることも知りました。もっと上手に描けたら、と、いう思いが強くなっていった頃です。

乗り降りしていた東銀座駅の階段に缶がするされ、その中に、絵画教室生徒募集のパンフレットが、刺さっているのを目にしたのが「小学館アカデミー 絵画教室」との出会いです。

その教室は、なんと私の料理教室の、前のビルでした。窓から、そのビルを見ると石膏の白い像が見え、人が行き来しているのが見えました。

それからは、そのビルが気になり覗き見しているうちに、絵を基礎から習ってみたい、という思いが強くなり思い切って、そのビルに行ってみました。

細い階段を上がり教室をのぞくと、そこにはイーゼルが並び、絵を描いている人の姿が見え覗き見していたとおりの教室風景でした。

その場で入会し、今に至りましたが、今でも窓越しに胸躍らせて覗き見をしていた絵画教室のことは忘れられません。

その教室も引越越しを重ね現在の教室になりました。教室では、絵を描くだけではなく「コーヒープレイク」には先生がコーヒードを挽き、そのコーヒードを、飲みながらの楽しい談話。

人と人との出会いと関わりの中で、自分を成長させてもらっているような大事な時を過ごしています。

三月になると友人から「作品展は何時から？」という電話があり、8人の仲間が会場に集まりますが、実は私の絵を「だし」にランチやお茶をするのが目的なのです。でも久しぶりに友人達と会う機会を作ってくれる作品展これも絵画教室のお陰と、その日が来るのを楽しみにしています。

コロナ禍の今「コーヒープレイク」もダメ……。「会食」もダメ……。寂しく、物足りない思いが続いています。

でも私は「コーヒードが入りましたよ」と、言う先生の声と「作品展は何時から？」と、

言う友人の電話が掛かってくる日を心待ちに、絵を描き続けるつもりです。

選者講評

- ・読むと場面が浮かび、美味しい香りや音まで聞こえてきました。穏やかな優しい文章がスッと入りませせていただいた。
- ・絵が人の輪を作ること、クラスの皆さんや有田さんの絵を楽しみにしている方々が微笑んでいる情景が短い文章ながら目に浮かび、読んでいるこちらまで心温まりました。強く印象に残るエッセイです。

- ・コロナ禍であってもポジティブな生き方に共感でき、文章がすらすらと入ってきました。
- ・絵が人の心を動かす、人との関わりの中で、絵も自分も成長させて貰えるという言葉が響きました。講師をしていて日々感じていることでもあり、改めて絵画教室で学ぶことの大切さを教えていただきました。

審査員特別賞

最大のテーマ

矢崎 達人（銀座校・毎週コース土B②）

絵画鑑賞、といえは有名な大型美術館で有名画家の絵を観ることだと思っていた。そして帰りに作品集等を購入し、ある種の「おしゃれ感覚」も満足させる。実に底の浅い、軽薄な鑑賞姿勢であつたと思うが、ある時を境に一変した。

その体験は今から7年ほど前、50歳前後の頃のこと。いろんなことが上手くいかず、気持ちが腐っていた私は、ある日職場を抜け出し（つまり「ざぼり」）、都心から電車に乗って下町へ向かった。直前、何かの拍子に「弥生美術館」の存在を知り、そこで開催していた「橘小夢（たちばな・さゆめ）」展に無性に行きたくなったのだ。初めて訪ねた弥生美術館は根津にある小さな美術館で、駅からも遠く、いわば都内の隠れ家的美術館のような感じだった。実際、お客はほとんどおらず、ほぼ私一人で静寂を独り占めした。美術館というより、どこか知らない他人の家にこっそり入り込み、居間のコレクションを眺めている、そんな感覚。展示作品のモデルは多くが女性。しかしどの女性も美しく描かれているようで、よくよく見るとかなりおぞましい内面が垣間見える。表層的な女性のイメージは完全に崩壊し、気色悪く絶望的にさえる。最初、見に来たことを正直後悔した。ところが見ていくうちに、それらの作品がなんとも言えない「デトックス効果」をもって私の前に圧倒的に迫ってくるのを感じ始めたのである。それは無意識の感覚でうまい言葉が見当たらないが、当時の私の心の状態が、独特な作品世界と何らかの共鳴を起こしたのかもしれない。

そして美術館を出るとき、私はすっかり活力を回復していた。

それ以来、静寂と、あのデトックス感覚を求めて、すいていそうな常設展や人氣が低そうな小規模展を中心に訪問するのが好みになった。案外心に響く作品との出会いも多く、折々の生活で溜まった不安や疲れをそつと活力に変えてくれるとても良い栄養剤。大病院みたいな長時間も並んだり、あるいは事前に予約するんじやなくて（それ自体で疲れてしまつ、身近にあって気楽に手が届く、あたかも家庭の常備薬のようなもの。かなりの間この常備薬にはまった後、ふと思つた。こんな素晴らしい常備薬を自分で作ってみたい！

それが絵画教室に通う最初のきっかけであつた。

そして3年半、「自分をデトックスする作品の制作」を最大のテーマに何とかなんとか通学を続け、少なくとも教室で描いている時間はデトックス効果抜群！と実感できるようになってきた。それだけでも絵画教室に通ってよかったな、と心から思いながら教室で絵を描いている。いつの日か、自分の作品にデトックスされたいと願いつつ……。

（なお、原体験になった強烈なデトックス効果のきっかけが、「仕事のざぼり」であつたことも、ここで改めて付言します。この経験により、私は「ざぼりの効用」を時々教室でも実践しております。丁先生、ごめんなさい！）

選者講評

- ・矢崎さんが絵を描くまでの行動が映像で浮かぶほどリアルに感じました。心を浄化するために描き続ける、そして、いつかは周りの人たちの心を癒す作品を描いてください。

- ・語彙が豊富、かつ軽快で情景や矢崎さんの心情の移り変わりがよく伝わってきました。最大のテーマを達成した作品、楽しみにしています！

優秀賞

父と私と絵を描く会

鈴木 尚子（銀座校・隔週コース木C①後半）

福島県の小さな町の小学校に通っていた私にとって、運動会よりも遠足よりも楽しみにしていた学校行事は秋に行われる「全校秋の絵を描く会」だった。もう、五十年くらい前のこと。朝から母に作ってもらったお弁当と木製の図画版と水彩画材一式を持って、前日から約束していた仲良しさんと前から目星を付けていた河原へまっしぐら。あれこれとおしゃべりしながら楽しい時間。遠くに見えるお寺の瓦屋根とさらさらと流れる川の水面と少し高くなったような夏空より薄い水色の空。子供ながらに、なんて素敵な構図なんだろうと、ちよつと背伸びしたような気持ちでスケッチ、着色、と進めていった。時間内に終わらない作業は宿題となり描きかけの絵を片手に帰宅した。それが、悲劇のはじまりだった。

私の父の趣味は絵画。かなり我流ではあったが、色々道具を買い込んだり、自室をアトリエのようにして油絵で家族の肖像画を描いたり楽しんでた。一日中外で絵を描いていた私は、すっかりくたびてしまい絵の仕上げは週末にゆっくりやろうと思いつた。父が満面の笑みで私にこう言った。

「なかなか良く描けてたね。でも、ちよつとぼんやりしてたから、少し加筆しておいてあげたよ」と。昭和の親たちはよく平気で親バカをして、子供の夏休みの工作や家庭科の裁縫を手伝うどころか代わりにやったりするのも珍しくもなかった。そんなわけで、リビングに置きっぱなしにした私のよく言えばパステル調、悪く言えば「ぼんやりした絵」はすっかり変貌をとげていた。絵の中でメインに位置するお寺の瓦屋根の瓦一つ一つに漆黒のふちどりがくつきりとされていた。ゴッホやマチスの絵を好んでいた父はセンス良く個性が出せたと更に嬉しそうに語っている。

メルヘン、パステル大好きな小学生の私が途方に暮れたのは言うまでもない。満足げな父には悪くて抗議することもできず小さな声で「ありがと」とだけ言って急いで自室に持っていったあの手この手で修正を試みたが無駄な抵抗であった。仕方なくそのある意味かなり「個性的」な絵を学校に持っていく図工の先生に首を傾げられたのに言い訳もできず何とも言えない複雑な気持ちになったのは子供のころの苦い思い出だ。そんな父も十六年前に他界し、私が今こうして水彩画を習っていることも、空から眺めていることだろう。銀座の教室から帰った描きかけの絵をリビングに置きっぱなしにしても、今は相変わらずのぼんやりした絵のまま。朝起きて、もしも、もしも例の「漆黒のふちどりが」が施されていたら、今度は大喜びして空に向かって心からの「ありがとっ！」を言おうと決めている。

選者講評

・絵を描くことを純粋に楽しんでいる幼い頃の記憶が鮮明に表現されていて、読んでこちらでも楽しい気持ちになりました。また絵にまつわるお父様との思い出もとても素敵だなと思いました。

・幼少期に描いた絵を鮮明に記憶し、色や構図まで細かく表現されていて、驚きました。お父様との楽しい思い出が今も絵画への強い関心、さらに愛情へと繋がっていることが伝わってきました。

優秀賞

リズムのある絵を目指して

中村 達也（銀座校・毎週コース木A②）

今日は6月27日曜日。スクールの予定を確認しようと年間予定表を取り出したら、それと一緒にエッセイコンテストの作品募集の案内書が出てきた。締切りが6月30日、まだ間に合う。応募者全員に参加賞をプレゼントと書いてある。開校20周年特別企画、きつと参加賞も特別なものと期待し、何かを書くことと決めた。参加することに意義がある、といわれるが、これはその場で最大限努力をすることだそう。文章を書くことは、小学生以来、苦手科目の1つだが、参加賞に気持ちが動き、絵についての今の気持ちを文章にすることにした。

絵を始めたきっかけは、今から10年ほど前、旅行先で感動した景色を残したい想いからである。写真という方法もあるが、写真を撮っても、自分の撮った写真では、記録にはなるが、感動があまり甦らない。写真はスマホでも簡単に撮れるので、数秒の作業、時間も掛からない。絵は、写真と違って、誰でも直ぐにできるものではない。絵の描き方を説明した市販本を買ったし、絵具、筆、パレットを使い、自己流で描き始めたが、小学生の時に絵を習って以来初めて描く絵は、感動を残すものとはほど遠い落書きに近かった。仕事でシドニーに滞在する機会があり、美しいシドニー湾の景色を描きたいと思った。シドニーの絵画スクールを探し、数か月週一で通ったが、オージーの鷹揚な教え方では初心者私に上達する余地はなかった。帰国後、絵を少しでも上達したいと思い、スクールを探し、ネットで小学館絵画倶楽部を見つけた。体験を受け、これは、上達するかもしれない、と思い、通うことにした。それから、もう何年経ったのか、はつきり覚えていないが、今は、油彩の描き方を教えてもらうところまで来た。

小学館絵画倶楽部の教授メソッドに驚いた。講師の先生の懇切丁寧なご指導。ホワイトボードにいつも貼ってある絵画の四大要素。この4つの重要性は頭ではわかっているつもりでも、なかなか現実の絵に反映させることができない。『絵画の基礎11章』という分厚いフルカラーのテキスト。書棚から出すにはちよつと重いが、特に最後の総章は、いつも講師の先生からご指導を受けている絵の基本ルール。これができれば、合格だが、なかなか身につかない。「連絡」が大事だといつも言われるが、この意味がまだ十分に掴めていない。最近、ようやく絵はリズムが一番大事なのか、そのための「連絡」かと思ひ始めた。絵は単調を嫌う。観る立場からも、動きのない単調な絵は、心地が良くない。これは、絵に限ったことではない。生活も、食事も、仕事も、人生はリズムが大事。人を満足にさせるのもリズムか。今は、このリズムを常に意識して描こうとしている。

これからも、伸びしろがあることを信じて、絵を描いていきたい。旅先での感動を絵に固定する。旅先で絵を描くこと自体、旅の想い出となる。最後に、講師の先生のご指導に心から感謝の意を述べたい。深謝！

選者講評

・絵と写真の違いについて、また教室のメソッドについての深い考察と分かりやすい解説に脱帽しました。

・記録ではなく、記憶に残る絵を「描きたい」という気持ちがよく伝わってきました。また、絵画倶楽部に通ったことにより、何かをつかみかかっているところがとても嬉しく思いました。

今から五十数年前、大学一年の時、学校の授業以外で初めて絵を描いた。

同じ学生寮の友人に誘われて佐伯祐三の絵画展に行ったのがすべての始まりだった。

印象に残る絵があった。

『ガス灯と広告』

パリの下町の古い分厚い壁、その壁に雑然と貼られた無数のポスター、ポスターに書かれた判読不明の文字。一本の黒いガス灯。

この絵の複製を買い求め、部屋の壁に貼った。

ある日、前述の友人と一緒に壁のこの絵を眺めていたときに「こんな絵を描いてみよう」と意見が一致、すぐにキャンバスや油絵の具材一式を買い揃えた。

絵画の基本的なことなど何一つ知らず、ただひたすらに佐伯祐三の絵の模写に励んだ。当然のことながら、佐伯祐三のような重厚な作品はできなかった。

またある日、週刊誌に掲載された荻須高徳の絵が目に残った。黙々とこれを模写し、一昼夜で描き上げた。絵の名前は『中庭に続くロケット通り』。

薄汚れた壁と窓、緑色のドア、中庭と通りを結ぶ暗いトンネル。トンネルの先の光。

これらの色のコントラストが気に入ったのである。原作にはとても及ぶはずはないのだが、自分では「我ながらよくできた」と思った。

その後他の作品にも挑戦してみたが、油絵に対する熱は次第にさめていった。

三嶋 俊一（三軒茶屋校・隔週コース火B①前半）

学校を卒業し会社員となり、先輩の誘いで会社の美術同好会に入った。

もっぱら飲み会に参加するばかりで絵筆を取ることはほとんどなかった。

秋、美術同好会の展覧会が催された。

作品の提出を求められたが描く時間がない。会場の壁が埋まらないからと再度提出を求められて、学生時代の作品、荻須高徳の模写を出品した。

展覧会の最中、なんとその作品を譲ってほしいという人が現れた。

「自分でも気に入っている作品なので」と丁重にお断りしたが、他の人にも気に入ってもらえたのかと内心嬉しかった。

その作品は今でも家にある。

初めて油絵を書いてから50年あまり経ったある朝、新聞のチラシに水彩画教室の体験講座の案内が入っていた。案内には富士山と桜の絵が描かれており、水彩画の持つ魅力なのか掲載された絵の魅力なのか、突然水彩画を描いてみたくなった。

68才の手習い、今回は我流ではなく一からの勉強である。

始めてみると実に楽しく、絵筆を持つと時の経つのを忘れてしまう。

油彩と水彩の違いはあるが、絵を描くときの高揚感を50年後に再び味わえるとは思ってもいなかった。

絵画教室で学び初めて4年、幸いなことにまだ熱は冷めていない。

・文章がとても軽快で次々と三嶋さんの世界に引き込まれました。自分の作品を譲って欲しいと言ってもらえるような作品を生み出し、人生の豊潤な時間を絵と共に過ごしていること、またこの絵画教室がその手助けをさせていただいていることが伝わり感銘を受けました。

・短文を紡いだテンポのいい作品。初めて絵を描いた頃から教室で学び続けている現在まで、絵画とご自身の付き合いが上手に描かれています。

選者講評

・文章がとても軽快で次々と三嶋さんの世界に引き込まれました。自分の作品を譲って欲しいと言ってもらえるような作品を生み出し、人生の豊潤な時間を絵と共に過ごしていること、またこの絵画教室がその手助けをさせ

感謝とこれから

